

西日本の初期須恵器

—三ツ城古墳の須恵器を中心として—

植 野 浩 三*

Early *Sue*-wares in Western Japan.

— mainly on the *Sue*-wares found in Mitsujō-tomb —

Koso UENO

(1980年9月30日受理)

1. はじめに

古墳時代中期、新たに朝鮮からもたらされた生産技術の1つとして須恵器生産がある。この須恵器生産に関しては、窯業史的研究、編年的研究などいくつかの成果をおさめていると言えるが、生産跡(窯跡)を中心としての研究が主であり、窯跡群を生産遺跡としてとらえたものは少ない。また、須恵器生産初期における須恵器の性格、特色は、遺跡での出土のあり方などから論じられているけれど、その資料性、総括性に乏しいと言える。須恵器生産、あるいはそのほかの手工業生産を論じる場合、その生産跡、生産遺跡のあり方、供給地とそのあり方をぬきに考えることはできないが、出土資料、遺跡等の制約からおのずと困難をきわめる面も多い。しかし、これらの様相を整理・総括し論究することにより、その社会を復原することは可能であろう。

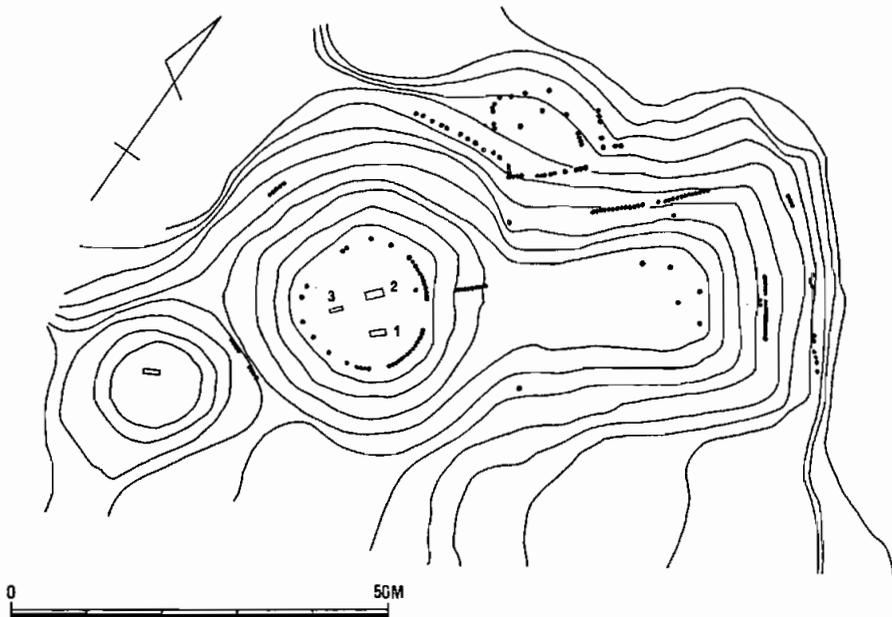
したがって本論は、古墳時代を復原するという観点に立ち、三ツ城古墳出土の須恵器を中心にして、初期須恵器をめぐる諸問題、特に供給のあり方について論究していきたい。

本題に入る前に三ツ城古墳の概要について記しておこう¹⁾。三ツ城古墳は、広島県のほぼ中央部に位置し、海岸線より10数km内陸部に入った西条盆地に所在する。西条盆地は、安芸地方最大の生産基盤をもち、古くから交通の要衝地として、あるいは安芸国の中核的な地として、大きな役割を果たしてきた地域である。現在の行政区画のうえでは、広島県東広島市西条町に属する。

三ツ城古墳はいうまでもなく、広島県下最大の規模をもつ前方後円墳で、全長84m、後円部径52m、前方部幅は52mであり、高さは約10mをはかるといふ。北に延びる舌状台地の先端を利用して築造しており、北側くびれ部付近に方形の造出しがある。部分的に葺石が確認されており、円筒埴輪、形象埴輪を配列している。主体部は後円部に2基確認されており、1号主体部は竪穴式石室、2号主体部は石槨式石棺、3号主体部は箱式石棺である。副葬品は多種多様におよぶが、その質、量ともやや貧弱である。墳丘の西側には、後円部に密接して陪塚と考えられる円墳が1基ある。

次に、本論で使用する名称・概念について説明すると、須恵器型式名は、田辺昭三氏の

* 考古学研究室



第1図 三ツ城古墳墳丘測量図（●印は埴輪，コンターは1m）

行なわれた型式編年²⁾に基づくものである。また、『初期須恵器』の概念については、かつて田辺氏が「日本で須恵器生産が開始された時から、地方窯が成立するまで（中略）この限られた時期の須恵器を一括して、初期須恵器とよぶことにする³⁾」、「初期須恵器とはTK・73、TK・216、TK・208の各型式に属する須恵器の総称ということになる⁴⁾」と定義されており、基本的にはこれに従うものである。

しかし、近年、宮城県大蓮寺窯⁵⁾、愛知県東山218-I号窯⁶⁾、愛知県城山2号窯⁷⁾等の、TK 208型式に併行、あるいはそれにやや先行すると考えられる窯跡が確認されており、地方窯はすでに、一部の地域においてTK 208型式の段階には成立していたと考えられる。

そして、このTK 208型式の須恵器は、須恵器が定型化し、日本化が完成し、技術水準が平均化した段階のものとしてされている⁸⁾。

そうしてみると、初期という限られた期間を設定する場合、初期須恵器とは、定型化前の須恵器、つまり日本で須恵器生産が開始し、規格化されるまでの須恵器（TK73・TK 216型式）とした方が妥当であると考えられる。したがって本論では、TK73・TK 216型式の須恵器を初期須恵器と呼ぶことにしたい。

2. 近年の須恵器研究

近年における発掘調査の件数は、おびただしい数である。そのなかで、初期須恵器も各地の遺跡で数多く検出されており、それらの遺跡、遺物の報告、研究も多くなされている。なかでも注目をひくのは、次に掲げる例である。

1967年、北野耕平氏は、野中古墳出土の須恵器（陶質土器）について論考されている⁹⁾。当古墳の主体部からは、4個の小型把手付碗が、墳頂部からは多数の器台、壺、高杯等の破片が出土している。特に小型把手付碗については、その類例を韓国の出土資料に求めら

れ、洛東江流域から舶載されたものと推測されている。また、日本における須恵器生産の開始は、伽耶地域からの陶工の渡来を想定されている。

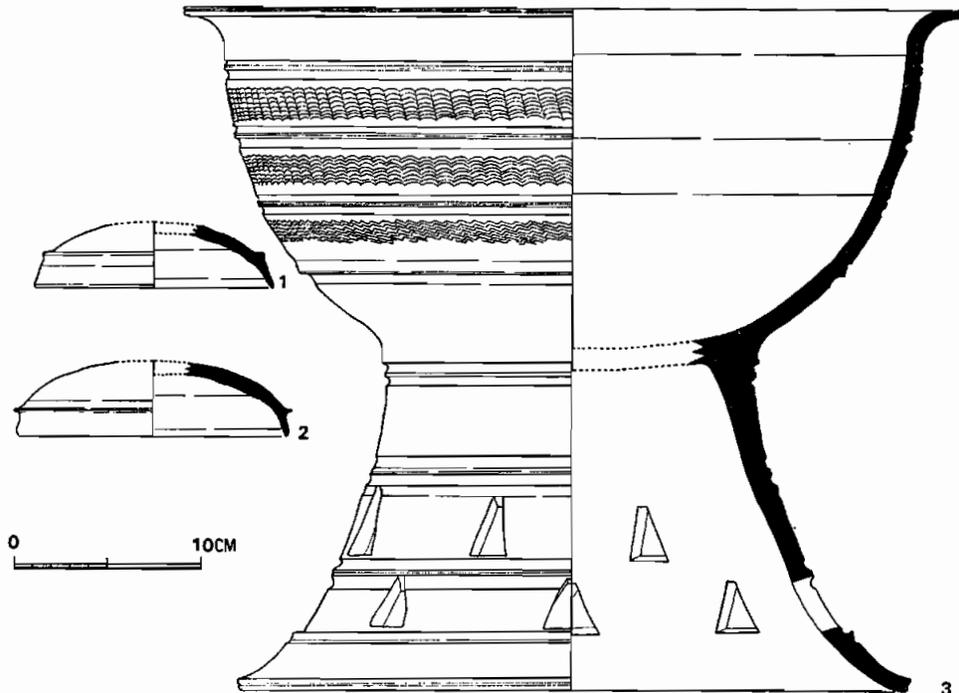
朝鮮半島南部における陶質土器研究の遅滞はいうまでもないが、ここで問題なのは、単に土器の形態、文様によってのみ比較検討が行なわれているということである。土器を観察する場合形態・文様の特徴を重要視することは言うまでもないが、最近の研究水準からすれば、弥生土器、土師器、須恵器を問わず、その製作技法の観察に重点を置くべきである。

したがって、北野氏の扱っておられる須恵器、陶質土器についても、製作技法の観点から再検討を要するのではなからうか。

一方、1976年から1979年にかけて、大阪府教育委員会より、陶邑古窯址群の調査報告書が刊行された¹⁰⁾。これは、かつて田辺氏が報告された資料を補うものであるが、考古学の基本とも言うべき『型式』論の認識について大きな相違をみせている。

中村浩氏の説に従えば、ある特定の窯名をもって型式名とするのは不適切であり、その窯の操業期間や陶邑という地域内における差の検討が必要とされている。そして、『床式編年』を提唱され、各窯の壁、床の重なりを検討することにより、窯の操業期間の推定、編年作業が可能とされ、さらに、各床の遺物の検討により、土器の型式差が求められるとされている。

以上の見解について私見を述べれば、まず特定の窯名を型式名に使用することの是非に関してであるが、これは『陶邑古窯址群』I」を精読すれば明らかなように、たとえばTK73号窯出土の須恵器の一群をもってTK73型式と称する場合、単に同一窯から出土したという漠然とした理由から型式設定されたのではなく、製作技法の検討、分析、器種組成の分析等の基礎的作業を前提として設定された型式である。そして、その型式名は、T



第2図 三ツ城古墳の須恵器

K73号窯の須恵器を標式とする最古の須恵器の総称であり、いわば記念名といえる。理論的・抽象的概念である『型式』概念をこのように理解すれば、特定の窯名を使用することについては、特に問題にする必要はなからう。

次に『床式編年』の有効性について述べると、まず操業期間の問題であるが、中村氏は窯跡の壁、床の重なりを検討することによって、操業期間を求めることが出来るとされているが、窯跡の壁、床の重なりはその窯の最小の使用回数を求めることはできても、それを直接、操業期間の長短に結びつけるのはやや無理があると思える。貼床間の遺物混入土層（間層）にしても、それは地形、自然条件に大きく左右されるであろうし、場合によれば人為的な土入れも考えられるであろう。したがって窯跡の操業・休止期間を壁、床の重なりで即決することは危険が大きく、慎重を帰する必要があるのではなからうか。

また、窯跡の層序関係によって土器の新旧が究明されるというが、これは中村氏の『床式編年』をまつまでもなく、層位学では自明のことである。しかし、窯跡の場合、その操業期間が断定しにくいことや、工人相互の手法の差等といった問題が数多く介在しており、編年作業を行なう場合困難な面が多いと考えられる。したがって、むしろ型式学的研究に重点を置く必要があろう。

以上、諸氏の研究に対しての若干の問題点について述べたが、これは本論の主旨とは直接関わることではないが、須恵器研究の基本的な問題であり、敢えて取り上げた。今後の研究の進展を望みたい。

3. 三ツ城古墳の須恵器

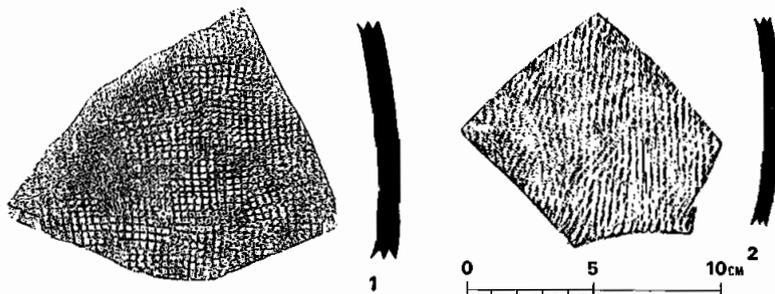
(1) 須恵器について

須恵器は北側造出しのやや西側、円筒埴輪列付近の表上直下から出土している¹¹⁾。造出し中央部からは、土師器が出土しているが、その他の遺物は検出されていない。出土須恵器には、杯蓋2、器台2、甕片がある。

(杯蓋) 第2図一1・2

天井部はやや丸みもち、天井部と口縁部をわける稜は丸くおさめるものと(1)、鋭く突出するものがある(2)。口縁部はわずかに外へひらき、(1)は稜線部の径よりも口径の方が大きい。口縁端部はいずれも丸くおさめる。天井部には緑褐色の自然釉がかかっており、手法の観察は困難である。内面は全体にわたり横ナデを行なっているが、内面中央部には仕上げナデを行なったとみられるかるい凹凸がある。断面は薄い赤褐色を呈しており、全体的に厚く仕上げている。口径はいずれも小片で復原したため多少の誤差はやむおえないが、

(器台) 第2図一3



第3図 三ツ城古墳の須恵器

(1)より(2)の方がやや大きい。胎土は2, 3mm程度の砂粒を少量含み、全体的にあらひ。焼成は良好である。

深めの杯部に、ふんばりのよい安定した脚部を付けた大型の高杯形器台である。口縁部は大きく外方へ屈曲し、端部には浅い凹線を施しているが単純な作りである。杯部は、2本の深く明瞭な凹線で3段に区画し、そのなかに回転を利用した櫛描波状文をめぐらしている。脚部はわずかに外反しながら裾へひろがり、脚部の器高は杯部に比べてやや短い。脚端部は浅い凹みをもつが単純な作りである。脚部は2本の明瞭な凹線によって3段に区画し、下2段に台形の透しを千鳥に配している。杯部・脚部にめぐらした2本一組の凹線は、その凹線間に浅い凹みが認められる。

もう1つの器台は¹²⁾(3)よりやや小ぶりの復原口径約37cmを計る高杯形器台である。口縁部は外方へ屈曲し、端部は単に丸くおさめる。杯部は低くつまみ出した凸帯により3段に区画し、そのなかに回転を利用した櫛描波状文をめぐらしている。口縁部直下には、太く張り出した凸帯を2本つけ、他の凸帯と趣を異にしている。脚部は断片的な破片であるが、杯部の器高よりやや長めであり、かるく外反する。脚端部は浅い凹みをもつが、平らに仕上げている。脚部には、高くつまみ出した太い凸帯により4区画し、上三段に回転を利用した櫛描波状文をめぐらしている。最下段の凸帯は中くぼみをもつ太いものであり、脚端部へつながる。脚部の上三段の区画には、方形の透しを千鳥に配している。

色調は両器台とも黒灰色であり、断面は部分的に薄い赤褐色を呈す。胎土は1mm以下の砂粒を多く含む。焼成は良好である。

(甕) 第3図—1・2

いずれも小片であるが、格子叩き目文と、平行叩き目文を残すものがある。(1)は、外面に3mm角の格子叩き目文を残し、内面はていねいに同心円文を消している。色調は外面が黒灰色、内面が青灰色を呈し、断面は赤褐色を呈す。胎土は緻密であり、焼成は良好である。

(2)は、外面にこまかい平行叩き目文を残し、内面は同心円文をていねいに消している。色調は淡青灰色を呈す。胎土は緻密であり、焼成も良好である。

2. 須恵器の時期

以上、須恵器の説明を行ってきたが、時期決定の基準となる諸特徴をあげると、まず共通の特徴として、端部を丸く単純におさめ、各箇所にはていねいな仕上げがなされている。杯蓋は口縁部が短く、外方へ開き、全体的に厚く仕上げている。器台も大型で、杯部は深く、凸帯、凹線は太く明瞭であり、櫛描波状文もていねいに施されている。甕は外面にいわゆる格子叩き目文を残し、内面はていねいに同心円文を消している。

これらの諸特徴は、いうまでもなく最古段階の須恵器にみられるものである。特に、甕の外面に残る格子叩き目文は、最古の須恵器にのみ認められるものであり、形態、文様、手法等の各部分を取り上げても、いずれも古い様相を呈しており、TK73型式に比定されるものである。

4. 三ツ城古墳の須恵器をめぐって

1. 初期須恵器の出土状態

三ツ城古墳の須恵器は、先に触れたように北側造出しより出土している。発掘時における出土状態は不明な点も多いが、おそらくこれらの須恵器は、造出しに置かれていたと推測される。

それでは、このような初期須恵器の出土のあり方を検討するために、三ツ城古墳以外で初期須恵器を出土している遺跡についてみてみよう。第一表は、西日本（兵庫県を含めた中・四国地方とする）で初期須恵器を出土した遺跡を表にしたものである。これによると、初期須恵器を出土する遺跡は古墳が大半であり、古墳以外の遺跡では、溝、住居址、包含

第1表 初期須恵器を出土した遺跡の一覧表 ■印は無黒斑の埴輪を出土

地域	番号	遺跡名	墳形・規模 (m)	内部構造	主な 副葬品(伴出遺物)	外部施設					須恵器の出土位置				須恵器	型式			備考
						周 深	埴 石	埴 輪	墳 頂	墳 丘 斜面	周 深	周 深	その他	T 73		T K 216	T K 208		
兵	1	吉田南遺跡			土師器・製塩土器						住居址 溝・包含層	蓋杯・高 杯・甕							
	2	砂部遺跡			紡錘車・勾玉・ 小玉・石孔円板・ 剣形模造品・銅 鏃・土師器						溝	蓋杯・高杯 把手付椀・ 甕・甕・壺 甕							
庫	3	印南野 2号墳	不明 南北11.1 東西6.45	竪穴式石室	馬具・甲冑・剣・ 鏃・刀子・鉄鏃・ 鋤先	■					石室	高杯・甕 二連甕							
	4	カンス塚 古墳	帆立貝 40	竪穴式石室		■					石室	杯蓋・壺 甕・高杯							
県	5	小谷遺跡									包含層 ?	器台					加西市中 央公民館 で見。		
	6	七ツ塚 7号墳	円墳	木棺直葬	鉄斧・鉄矛・鉄鏃・ 鏃・帯金具・土師器			■				壺・高杯							
	7	宮山古墳	円墳 30	竪穴式石室 3	越龍鏡・画文帯神 獸鏡・玉類・甲冑・ 馬具・剣・刀・鉄鏃			■			石室	蓋杯・器台 高杯・壺 甕							
	8	蟻無山 古墳	円墳 57					■				器台					採集		
	9	黒島 1号墳	前方後円墳 70	竪穴式石室				■				甕・甕・ 杯身					採集		
岡	10	黒島 2号墳	円墳 10								古墳 周辺	杯蓋・甕 高杯					採集		
	11	波歌山 古墳	前方後円墳 50	竪穴式石室 木棺直葬				■			西側く びれ部	甕・高杯					採集		
	12	幡多庵寺			土師器・製塩土 器・玉類						包含層								
	13	上の山 1号墳	方墳12.8	配石墓壇 箱式石棺	土師器			■				甕・甕							
山	14	宮山 4号墳	方墳 南北18.9 東西13.5					■				蓋杯・ 樽形甕							
	15	四辻 1号墳	円墳 16×18	木棺直葬	勾玉・小玉・櫛・ 剣・刀子			■				把手付椀 高杯							
	15	門前池遺跡			土師器・製塩土 器						包含層	蓋杯・甕・ 甕							
県	17	法伝山古墳	方墳 40					■				蓋杯・高杯							
	18	酒津～水江 遺跡										器台・蓋杯					採集		
広島	19	七ツ塚古墳	円墳 10	箱式石棺	刀・鉄鏃・鉄斧・ 剣・勾玉・白玉・ 鏃先・土師器						副室	甕・甕							
	20	四捨貫 小原4号墳	円墳11.5					■				杯							
	21	天狗松南 6号墳	円墳 7.6	木棺直葬 ?				■				杯							

広島県	22	新迫南4号墳	円墳7.5	木棺直葬									杯蓋		
	23	新迫南7号墳	円墳12.7	木棺直葬	土師器・勾玉・菅玉								杯・甕		
	24	諸木古墳	円墳 11	土壇(礫床)	小玉・鉄釧・鉄鎌 紡錘車・土師器								甕		
	25	三ツ城古墳	前方後円墳84	竪穴式石室 石箱式石棺 箱式石棺	珠文鏡・銅釧・鉄鎌 竹櫛・刀・劍・鉄鎌 鉄矛・土師器						造出し		杯蓋・器台 甕		
	26	皆賀遺跡											甕		採集古墳?
島根県	27	長瀬高浜遺跡	円墳 その他								周辺			1・3号墳	
島根県	28	薬師山山古墳		箱式石棺?	四乳鏡・鉄鎌・刀 右孔門板・土師器								蓋杯・高杯 甕・壺		採集
	29	金崎1号墳	前方後方墳36	竪穴式石室	内行花文鏡・刀 勾玉・垂飾耳飾 土師器								蓋杯・台付 壺・長頸壺 甕・高杯・器 台・五連甕		
	30	長尾古墳											器台		採集
山口県	31	木崎遺跡2号円形周溝墓	円形周溝墓 7.5	箱式石棺									高杯		
徳島県	32	日出遺跡			土師器・製塩土器 鉄鎌・右孔門板							包含層	蓋杯・甕 壺		

層からの出土が数例確認されている。

古墳出土の場合、出土地点は次のように大別される。即ち、Ⅰ. 棺内・石室内、Ⅱ. 墳頂部、Ⅲ. 墳丘斜面、Ⅳ. 墳丘裾部、Ⅴ. 造出しである。Ⅰは、印南野2号墳¹³⁾、カンス塚古墳¹⁴⁾、宮山古墳¹⁵⁾、七ツ塚古墳¹⁶⁾等があり、特に七ツ塚古墳は、須恵器を副葬するための副室を設けている点に注目される。Ⅱは、七ツ塚7号墳¹⁷⁾、上の山1号墳¹⁸⁾、木崎2号墓¹⁹⁾等があり、採集資料では黒島1号墳²⁰⁾等がある。墳頂部の遺物には主体部直上のももの含まれる。Ⅲは法伝山古墳²¹⁾等がある。Ⅳは、波歌山古墳²²⁾、新迫南4号墳²³⁾等がある。Ⅴは三ツ城古墳のみである。

古墳以外の出土では、遺構に伴ったものは非常に少ない。吉田南遺跡では、住居址からTK 216型式からTK 208型式にかけての須恵器が一括して出土しており、住居址周辺の溝、包含層からも同様な土器が検出されている²⁴⁾。砂部遺跡では、溝内よりTK 216型式からTK 23型式の須恵器が、土師器等と共に出土している²⁵⁾。また、幡多廃寺²⁶⁾、門前池²⁷⁾、日出遺跡²⁸⁾では、いずれも包含層ではあるが、TK 73～TK 208型式の須恵器を出土している。

2. 初期須恵器の性格

このような出土状態でわかるように、初期須恵器は多くの場合古墳の墳頂部、墳丘斜面、墳丘裾部、あるいは造出しより出土している。ではここで、初期須恵器の用途、性格を具体化するために、三ツ城古墳で認められる造出しの須恵器について考えてみたい。

一般に古墳の造出しは、前方後円墳の墳形が前方部を祭壇として発生し、墓前の儀礼を行なったものから、しだいに祭祀の場は墳丘のくびれ部に移り、さらには祭壇的な造出しを発生させたと言われている²⁹⁾。

愛知県断夫山古墳では、西側造出しから多量の須恵器が検出された事実によって、造出しを一種の祭壇とみる言われている³⁰⁾。

また、岡山県月の輪古墳は、円墳に造出しを設けた帆立貝式の古墳であるが、造出しに

は埋葬が行なわれており、舟形土製品と笊形土器が出土している。この祭祀的な遺物が、直ちに墳丘の埋葬を対象とするものとは言えないとされているが、円墳あるいは前方後円墳の場合も、造出しで何らかの祭祀が行なわれたということは認められている³¹⁾。

このように、造出しは、即、古墳の主たる埋葬を対象とした祭祀の場とは限定できないまでも、古墳築造に際しての祭祀や、葬送儀礼に何らかの機能を果たしていたと考えられる。したがって、造出しがこのような機能の一端を担っているとすれば、三ツ城古墳で見られるような造出しの須恵器も、古墳築造における祭祀、葬送儀礼に使用されたものとするることができる。

一方、造出しを設けない古墳の場合、初期須恵器は墳丘面において確認されている。これは、須恵器（伴出遺物を含めて）を墳丘面に設置すること、あるいは墳丘面において使用することに大きな意義があったと考えられる。造出しを備えないという古墳の制約から、造出しで行なわれていた祭祀、葬送儀礼の諸行為が、墳頂部、墳丘斜面・裾部で行なわれたと推察できるのである。

したがって、墳頂部、墳丘斜面・裾部から出土する初期須恵器も、造出し出土の須恵器と同様に、一般に古墳築造に関しての祭祀、あるいは葬送儀礼に使用されたと考えられ、儀器としての機能を果たしていたと考えられる。

なお、造出しより初期須恵器を出土した他例としては、奈良県ウワナベ古墳³²⁾、三重県神前山1号墳³³⁾等があり、墳頂部、墳丘斜面では、大阪府野中古墳³⁴⁾、堂山1号墳³⁵⁾等がある。

一方、棺内・石室内出土の初期須恵器は、被葬者が生前、宝器あるいは貴重品として取り扱っていたと考えられるが、副葬品としての性格（儀器）の可能性も強いと思われる。

では次に、古墳以外の出土須恵器についてみると、砂部遺跡では弥生時代から6世紀中頃まで継続する溝から、初期須恵器と共に滑石製紡錘車、勾玉、剣形模造品、双孔円板、滑石製小玉、ガラス製小玉等が出土している。また、滋賀県湖西線関係遺跡では、ⅢE区黒色泥砂層より、TK 216 型式の須恵器と、滑石製勾玉、有孔円板、子持勾玉、剣形模造品等が伴出している³⁶⁾。溝あるいは包含層という性格上、初期須恵器と祭祀遺物が、同時期存在（使用、投棄）とするのは危険であるが、仮に同時に使用されたとするならば、初期須恵器も祭祀に関係して使用されたと考えられる。

吉田南遺跡では、初期須恵器が住居址のなかから数点出土している。伴出遺物には土師器、製塩土器等があり、住居址内には祭祀的な特殊遺物はなく、日常的な雑器として使用されていたと考えられる。この須恵器は、TK 216 型式に属するものであるが、そのなかでもやや新しい要素をもち、TK 216 型式からTK 208 型式へ移る過渡的な様相を呈している。いうなればTK 208 型式直前の須恵器ということができる。

西日本において、初期須恵器が住居址より出土する例はほとんどなく、吉田南遺跡で確認されたのみであろう。専ら古墳あるいは祭祀遺跡で、祭祀、葬送儀礼の儀器として使用されていたものが、集落内で実用的な日用雑器として使用されるようになったと考えられる。これは、吉田南遺跡でうかがえるように、TK 208 型式前後に求めることができ、用途における画期とすることができよう³⁷⁾。なお、この場合、陶邑古窯址群周辺地域は別個として考えねばならない。また、窯跡における器種組成のあり方、あるいは窯跡の生産遺跡としてのあり方等を、今後検討していく必要がある。

3. 初期須恵器と埴輪

三ツ城古墳では、須恵器、土師器のほかに、円筒埴輪、形象埴輪等、多数の埴輪が検出されている。埴輪は、その焼成方法の違いによって生ずる、いわゆる黒斑をもつ埴輪と、窖窯で焼成されたと考えられる無黒斑の埴輪とに区別されているが³⁸⁾、三ツ城古墳の場合後者の無黒斑の埴輪である。そこで、須恵器製作技術と関連の深い、無黒斑の埴輪を問題にして、論を進めていきたいと思う。

無黒斑の埴輪を出土している古墳は、三ツ城古墳のほかに、印南野2号墳、宮山古墳、黒島1号墳等がある。そして、これらの古墳は、いずれも三ツ城古墳と同様TK73型式の須恵器を伴出している。

それでは、無黒斑の埴輪が畿内中心部のみならず、三ツ城古墳等のように地方で確認されていることは、どのように理解すべきであろうか。埴輪はいうまでもなく、古墳築造に際して生産されるものであるから、その生産は古墳の周辺、あるいは被葬者がかつて統轄していた地域内で行なわれたであろう。そうすると、埴輪を焼成する場合窖窯を構築し火入れを行なうことは、相当の技術の熟練を必要とし、当然そこには須恵器工人の来訪、あるいは技術的交流があったと考えられるのである。

また、和歌山県紀ノ川下流北岸地域や、大阪府淡輪地方において、須恵器の製作技法が埴輪に使用されていることは、すでに明らかにされており、その生産には須恵器工人の存在を指摘されている³⁹⁾。このように、無黒斑の埴輪の生産には、須恵器工人との技術的交流を必要とし、それなくしては窖窯により埴輪の生産は不可能であったと考えられる。

反面、埴輪に須恵器の技術導入があるとすれば、須恵器生産開始期において、埴輪工人がその生産に大きく関与していたとも考えられるのである⁴⁰⁾。

そして、地方において須恵器窯が成立し、須恵器生産が開始された場合、東山218-I号窯、城山2号窯、久居2、4号窯⁴¹⁾等のように、単に須恵器のみならず埴輪も共に生産している。このことから考えられるのは、埴輪が古墳の築造に際して生産されるという性格をもち、須恵器もおもに古墳の葬送儀礼に使用されるわけであるから、そこには何らかの有機的な関係が存在し、地方窯の成立が少なからず古墳の築造にかかわりをもっていたと考えられる⁴²⁾。この是非に関しては後日に譲るとしても、同一窯で須恵器と埴輪を生産することは畿内中心部では認められないことであり、地方の一特徴と言えるであろう。

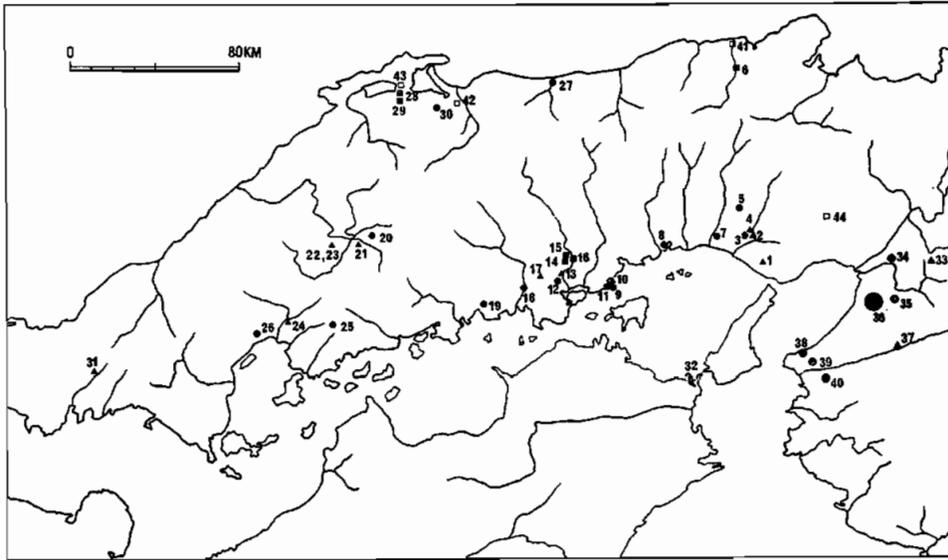
5. 初期須恵器の生産と供給

1. 初期須恵器の生産

朝鮮からもたらされた須恵器生産の技術が、阪南丘陵を中心として開始され、定着したことは言うまでもない。では、須恵器生産開始期、つまりTK73型式の時期の生産のあり方をみると、窯跡のほとんどが谷の入口付近に立置し、分布もまばらであり、その総数も10基に満たないものであったと考えられる⁴³⁾。10基に満たない窯が、同時に煙を上げていたか否かは即断しがたいが、初期の須恵器生産がかなり小規模なもので、その生産量も後の時期のものに比べると比較にならない程の量であったことがわかる。

個々の土器は、精巧なものから幼稚なものまであり、全体的に1つの土器に対する整形は入念に行なわれている。器種は甕、壺類が主体をなし、そのほかに耳杯、甗、楡形壺等とバラエティに富んでいる。

このように、須恵器生産開始期にあつては、窯跡もまばらであり、土器も製品としては不揃いといえ、その生産は技術習得の時期とすることができよう。また、生産にあたって



第4図 初期須恵器出土遺跡分布図 (No. 1~32 は第1表と同一遺跡)

- | | | | |
|---------|-----------|----------|--------------------|
| ●—TK73 | 33 ウツナベ古墳 | 37 陵山古墳 | 41 鬼神谷窯址 |
| ▲—TK216 | 34 堂山1号墳 | 38 西小山古墳 | 42 高畑窯址 |
| ■—TK208 | 35 野中古墳 | 39 楠見遺跡 | 43 大井窯址 |
| □—窯址 | 36 陶邑古窯址群 | 40 岩橋千塚 | 44 末古窯址 (AN-88-B窯) |

の技術教授，集団の組織化は不整備であり，まさしく小規模な生産であったことは間違いない。そして，朝鮮の製陶技術が日本にもち込まれ，その生産が開始すること，また陶邑窯が大阪平野に隣接することは，そこに政治的な力が強く働いていたと考えられるのである。

2. 供給について

このような須恵器生産のあり方をふまえ，次に供給について述べてみたい。まず，初期の須恵器生産がかなり小規模なもので，陶邑窯周辺に限られることは，初期須恵器が陶邑周辺地域から地方へ，一元的に供給されたとすることができよう⁴⁴⁾。そして，それはおもに古墳築造に際して，葬送儀礼の一端を担うものとして，持ち込まれたのである⁴⁵⁾。

では，その供給とはどのような意味をもつのであろうか。初期須恵器が地方へ供給された場合，それは貴重品であったであろうし，希少価値をもつものであったことは容易に推察できる。希少価値をもつ須恵器の生産に政治的な力が働き，その供給も畿内中心部より一元的に行なわれたならば，初期須恵器は，畿内政権と，地方豪族との政治的な関係のなかで供給されたと考えられるのである。そして，この政治的関係は，畿内政権あるいは地方豪族にとっても，重要な意味をもつものであったと考えられる。なお，この政治的関係とは，畿内政権と地方豪族との間に取り結ばれたであろう，支配，服属，同盟等の諸関係としておく。

供給にあたっては，幾多の交通路を通じたと考えられるが，特に西日本においては，瀬戸内海を利用する海上交通に負うところが大きいことはいままでもない。瀬戸内海は，弥生時代，古墳時代に限らず，国内の通交で，あるいは大陸との対外交渉のなかで，海上交通として頻りに利用され，大きな役割を果たしてきたのである。そして，この『交通』と

は、即ち「経済的側面では、商品交換や流通や商業および生産技術の交流であり、政治的領域では戦争や外交をふくむ対外諸関係であり、精神的領域においては文字の使用から法の継受にいたる多様な交流⁴⁶⁾」とすることができる。

そこで、初期須恵器の分布をみることにしよう。まず、一見してわかることは、初期須恵器が姫路平野、岡山平野を中心として、おもに瀬戸内海沿岸に集中して分布していることである(第4図)。特に、TK73型式の須恵器を出土するものはこの傾向が強いようである。

そして、これらの初期須恵器を出土する古墳を、墳形、墳丘規模、施設、副葬品等で比較した場合、各古墳にかなりの格差を認めることができる(第1表参照)。墳形をみた場合、前方後円墳、前方後方墳、方墳、円墳、その他が存在するが、規模をみると、前方後円墳である三ツ城古墳、黒島1号墳等の大型古墳を筆頭に、印南野2号墳、セツ塚古墳、四拾貫小原4号墳等の10m前後の小円墳まで存在している。外部施設、主体部も同様であり、周濠、葺石、埴輪をもつもの、堅穴式石室、木棺直葬、箱式石棺を備えるものと多種多様である。副葬品も豊富なものから貧弱な内容のものまで存在する。初期須恵器が大古墳のみならず、小古墳(墳丘、施設、副葬品等が貧弱)にまで供給されており、概していえば、初期須恵器が広範な地域を統轄し、絶大なる権力を保持していた巨大首長墓(たとえば三ツ城古墳等)のみならず、小地域、あるいは大首長に従属していた中小首長墓にまで供給されていたと言える。

これらのことからうかがえるのは、初期須恵器が政治的なルートにのり、葬送儀礼に使用する目的から大・小の古墳をとわず供給されたということである。そして、これは、畿内政権が瀬戸内海を大陸との対外交渉上、重要な交通路であることを意識し、その航行、活動に際して、多大な政治的配慮をはらったと考えられるのである。初期須恵器が、巨大首長墓のみならず、中小首長墓にまで直接的、間接的に供給されていることは、このように海上海動における畿内政権の政治的配慮を示しているといえよう。

したがって、初期須恵器の供給は、瀬戸内海沿岸部においては、海上海動にあたっての政治的配慮と考えられるが、三ツ城古墳の場合も例外ではなく、海上活動にあたっての政治的配慮、そしてそれを含めたすべての政治的諸関係のなかで供給されたと考えられる。なお、初期須恵器が山間部、山陰地方に供給された場合は、海上活動とは言えないまでも、交通上の問題を含めて、畿内政権との政治的諸関係のなかで供給⁴⁷⁾されたことは言うまでもない。

6. おわりに

初期須恵器は、おもにその供給地である古墳のあり方により、葬送儀礼を担うものとして使用され、その供給は、畿内中心部より、畿内政権と地方豪族との政治的諸関係のなかでとり行なわれた。そして、三ツ城古墳の場合もこの1例とすることができた。

須恵器が、本来、きわめて機能的な雑器、容器の性格をもっていたにもかかわらず、このような様相を示すことは、須恵器生産開始期における諸条件に起因するものと考えられる。そして、地方窯が成立し、須恵器生産が拡大していく段階において、須恵器は碌、器台(装飾付)にみられるような儀器的な性格を一部残すけれど、大半が日用雑器として使用されていくのである。

最後に、初期須恵器にみられたこのような様相を、古墳時代を復原する際の1要素として位置づけ、論究するのが本論の目的であった。しかし、今や初期須恵器は南は、九州か

ら北は東北にまでおよんでおり、西日本（本論でいう兵庫県を含めた中・四国地方）という枠では把えきれないものがある。陶邑古窯址群周辺はもとより、全国的な把握が必要であろう。さらに、古墳時代を復原する場合には、政治、経済を含めた社会構造の究明が必要であり、今後の課題としておきたい。

注

1. 松崎寿和ほか『三ツ城古墳』（『広島県文化財調査報告』第1輯 広島県教育委員会）1954
2. 田辺昭三『陶邑古窯址群』I（『平安学園研究論集』第10号 平安学園考古学クラブ）1966
3. 田辺昭三「須恵器の誕生」（『日本美術工芸』第390号）1971
4. 田辺昭三「須恵器生産の開始と展開」（『日本美術工芸』第391号）1971
5. 古窯跡研究会『陸奥国官窯跡群』II（『古窯跡研究会研究報告』第4冊）1976
6. 荒木実ほか「東山218号窯の古式須恵器について」（『古代人』第33号）1978
7. 尾張旭市教育委員会『尾張旭市の古窯』1978
8. 前掲註 4
9. 北野耕平『河内野中古墳の研究』（『大阪大学文学部国史研究室研究報告』第2冊）1976
10. 大阪府教育委員会『陶邑』I～IV（『大阪府文化財調査報告書』第28～第31輯）1976～1979
11. 新谷武夫「安芸・備後の古式須恵器」（『古文化談叢』第5集）1978
12. 三ツ城古墳では、第2図3のほかにもう一個体の器台（本論では未掲載）が出土している。
13. 上田哲也『印南野』—その考古学的研究1—（『加古川市文化財調査報告』3 加古川市教育委員会）1965
14. 喜谷美宣「兵庫県加古川市カンス塚古墳」（『日本考古学年報』19）1966
15. 松本正信ほか『宮山古墳発掘調査概報』（『姫路市文化財調査報告』I 姫路市文化財保護協会）1970
松本正信ほか『宮山古墳第2次発掘調査概報』（『姫路市文化財調査報告』IV 姫路市文化財保護協会）1973
16. 鎌木義昌ほか『長福寺裏山古墳群』長福寺裏山古墳群関戸廃寺址調査推進委員会 1965
17. 瀬戸谷皓『七ツ塚古墳群』（『豊岡市立郷土資料館調査報告書』第8集 『豊岡市文化財調査報告書』第8集 豊岡市教育委員会）1978
18. 岡山市教育委員会『岡山市御神上の山1号古墳発掘調査報告』1974
19. 山口県教育委員会『朝田墓墳群』I 木崎遺跡 1976
20. 根木修「初期須恵器の諸問題」（『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会）1975
21. 藤田憲司、間壁忠彦「法伝山古墳」（『倉敷考古館研究集報』第10号）1974
22. 前掲註 20
23. 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』2 1979
24. 田辺昭三氏の御教示による。
25. 砂部遺跡調査団『加古川市砂部遺跡』加古川市教育委員会 1978
26. 前掲註 20
27. 岡山県教育委員会『門前池遺跡』（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』9）1975
28. 同志社大学文学部文化学科『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』（『同志社大学文学部考古学調査報告』第3冊）1968
29. 亀井正道『信仰から儀礼へ——祭礼遺跡——』（『世界考古学大系』第3巻 平凡社）1959
小出義治「思想の推移——祭祀——」（『日本の考古学』V 河出書房新社）1966
30. 大場磐雄「断夫山古墳の造出に就いて」（『考古学雑誌』第20巻第1号）1930
31. 西川宏「造り出し」（『月の輪古墳』第3部第7章 327～338頁 月の輪古墳刊行会）1960
32. 奈良国立文化財研究所「ウワナベ古墳東外堤」（『平城宮発掘調査報告』VI）1974

